



Data

監督：エリック・ポッペ

出演：ジュリエット・ピノシュ／ニコライ・コスター＝ワルドー／ローリン・キャニー／エイドリアナ・クレイマー・カーティス／マリア・ドイル・ケネディ／ラリー・マレン・ジュニア／マッツ・アウスター／クロエ・アネット

👁️👁️ みどころ

報道写真家（戦争写真家）の行動は命の危険と裏腹だが、レベッカはなぜそんな職業を選択し、命を賭けているの？その社会的役割は高く評価されているようだが、その帰りを待つ夫や娘たちの気持ちは？

男なら「仕事が命！」で済んでも、女の場合は仕事？それとも家族？という問題が……。愛する家族のため「もう戦地には行かない」と約束をしたレベッカだったが、それは本心？それとも……？

アフガニスタンの首都カブールやケニアの難民キャンプに見る、過酷な現実。それを、衆議院議員総選挙の投票率52%という日本の現実と対比しながら考えるとともに、本作のヒロインの生きざまをしっかりと考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□この女優に注目！冒頭から息を呑む緊張感！■□

名女優ジュリエット・ピノシュが『イングリッシュ・ペイシエント』（96年）における、献身的な看護師ハナ役で、第69回アカデミー賞助演女優賞に輝いたのは、1997年（『シネマルーム1』2頁参照）。それから17年も経っているから、1964年生まれのジュリエット・ピノシュも既に50歳。往年の美しさは失われたものの、2人の子を持ちながら、報道写真家として生命の危険さもある紛争地で、懸命にシャッターを切るジュリエット・ピノシュ演じるレベッカのキリリとした佇まいは印象的だ。

とりわけ、本作冒頭、暗いスクリーンの中で見える動きは、息を呑む緊張感を持っている。今スクリーン上に映っているのは一体ナニ？それを考えながらスクリーンを凝視していると、開けられた車のドアから黒いブルカに身を包み、でっかい望遠レンズのついたカ

メラを手に持ったレベッカの姿が……。まずは、こんな息を呑む冒頭の緊張感に、思わず手に汗が……。

■□■報道写真家として自爆テロ犯に密着！■□■

ここは、アフガニスタンの首都カブールらしい。そして、とある場所で「お葬式」のような儀式を経た後、ある建物の中で1人の若い女性の身体に爆弾を巻きつけるシーン、この女性に別れを告げるシーン、爆弾を身に纏い、ブルカをその上に着た女性が車に乗り込むシーンが次々と映し出されている。その「被写体」に対して絶え間なくシャッターを切っていたレベッカは、更に許可を得て車に同乗すると、後部座席に座る女性の顔を何度もカメラに。そして、無事検問所を抜けたかに思えたが、ある場所で警察官に車を止められる中、身の危険を感じたレベッカが車の外に出て行くとともに、後方から車の様子を見てみると……。

アフガニスタンやイラク、そしてコンゴなどのアフリカ諸国の戦争状態ともいえる紛争地帯に赴き、現地でもナマの写真を撮る報道写真家（戦争写真家）が常に生命の危険にさらされるのは宿命だが、そこでレベッカが「爆弾よ！」と叫んだことが契機となったのか、現実にあの若い女性を乗せた車は大爆発。これによって車の周辺にいた多くの人たちが死亡あるいは重傷を負ったうえ、後方からこれを見守っていたレベッカも爆風でカメラもろとも吹き飛ばされ、肺に穴が開いてしまったから、命さえ危惧される状態に……。

アホバカ・バラエティー番組をグラグラ笑いながら観ている日本人が多い中、自爆テロ犯に密着するレベッカの行動力に注目！

■□■アイルランドの「我が家」では……？■□■

入院するレベッカの傍には、今、優しい夫のマーカス（ニコライ・コスター＝ワルドー）の姿が。そして、2人が久しぶりに「我が家」に帰ってくるシーンを見ていると、右ハンドルの車だから、「我が家」はアメリカやフランスではないことがわかる。ストーリーの展開につれて、レベッカの「我が家」はアイルランドにあり、夫のマーカスは海洋科学者として働いているということがわかる。

そこでレベッカの帰りを待っていたのは、長女ステファニー（愛称ステフ）（ローリン・キャニー）と次女リサ（エイドリアナ・クレイマー・カーティス）。「我が家」では、心身ともに傷ついたレベッカにマーカスが優しく接していたが、それは表面上だけで、何となく雰囲気怪しい。こりゃきっと、何か言いたいことがあるはずだ。そうにらんだレベッカが、ある日マーカスに対してそんな質問をぶつくと、マーカスからは「もう君とは無理だ。やっていけない」という意外な言葉が。それは一体なぜ？また、天真爛漫なリサは、その時々母親の優しさだけで納得させることができていたが、思春期にあり、自らもアフリカ問題のサークルでいろいろな活動をしているステファニーは、母親の実績に敬意を示す一方、いつも母親がいない寂しさの整理をつけることができていなかった。そのため、

ややもすればステファニーは自分一人だけの世界に入り、父親も母親も拒否するという悪しき傾向に・・・。

そんな夫と娘2人の気持を論理的に代弁し、レベッカに強くアピールしたのは夫のマーカス。レベッカが常に死と隣り合わせの中で仕事をしていることに怯えながら毎日を暮らす夫と娘がどれだけ大変かわかるか？真正面からそう言われると、報道写真家としての自分の役割を認めてもらいたいと思いつつ、レベッカは妻として母親としてどうあるべきかをあらためて問い直さなければならないことに・・・。そこで、彼女が下した結論は・・・？

■□■母親として生きる！一度はそう決心したが・・・■□■

本作を監督した1960年ノルウェーのオスロ生まれのエーリク・ポッベ監督は、1983年から87年まで報道写真家として世界各地を回った体験があるらしい。したがって、本作はそんな自分の体験談を元にし、報道写真家を男から女に変えて映画化したものだ。主人公を女性にしたのは、イスラム圏では女性は男性ジャーナリストが入れない領域にも入っていけるため、写真家でも男より女の方が紛争の全貌を捉えるのに適しているらしい。そう言われると、たしかに冒頭のシーンの写真は男性カメラマンではきっと許可されないはずだ。

さまざまな葛藤を経て、レベッカが「もう紛争地には行かない」とマーカスに明言しても、マーカスは「信用できない」と返事していたが、さてレベッカの決心の程は・・・？レベッカが親友のジャーナリスト、テレサ（マリア・ドイル・ケネディ）からの「次の仕事」を、「私には家族がいる」「もう戦地には戻らない」と断ったのは英断だが、他方で、せっかくな命懸けで撮ったカブールの写真集が、「自爆テロを美化している」との理由で出版できなくなったと聞かされると、大きな怒りが・・・。ということは、やはりレベッカは自分の報道写真家としての実績にこだわりを持っているのでは・・・？

■□■ここは絶対安全！そんな紛争地域ってあるの？■□■

そんな時、「ここは絶対安全だから」という説明付きで、旧知のスティグ（マッツ・アウスダール）から舞い込んだオファーが、ケニアの難民キャンプの撮影だ。レベッカはこれも即座に断ったが、ステファニーが高校の研究課題のために是非行ってみたいと言い始めたため、今度はステファニーと父親マーカスとの論争に。そこではレベッカもいかないと決めたと言っていたが、じっくり考えたマーカスがステファニーのケニア行きを許可すると、レベッカも当然それに同行することに。

13歳ながらしっかり者のステファニーにとって、レベッカからもらった（払い下げられた？）1台のカメラを手にしてのケニアの難民キャンプめぐりは、興味津々。これだけの経験をすれば発表できるネタは山ほどあるはずだ。眠る場所はもとより、水や食事、空気や気温等々、心配事は山ほどあるが、ステファニーにとってこのケニア旅行は貴重な体

験になるはずだ。もっとも、それはスティグの言うとおりの「絶対安全な地域」ということが大前提だったが、一同が帰路に着く頃には、一転してキャンプ地は騒然とした状況に・・・。

■□■原題は？邦題は？■□■

本作の原題は『A Thousand Times Good Night (何千回ものおやすみを)』。これはシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の中の愛の言葉だが、本作にはそのタイトルがいかにもピッタリのシーンが何度も登場する。ちなみに、邦題は『おやすみなさいと言いたくて』だが、わざわざ原題をこのように変える必要はなかったのでは・・・？

最も印象的なシーンは、ケニアの難民キャンプの中のベッドで交わされる母娘の会話後の「Good night」だ。これはレベッカがはじめて大人としてのステファニーと心を交わした瞬間になる。「Good night」に至るまでの会話は、「なぜ戦場写真を撮り始めたのか？」という質問に対して、レベッカが撮り始めた頃は「怒りからだ」というもの。母娘の会話は更に、「今も怒ってる？」「ええ、でも今は飼い馴らした」・・・と続くが、きっとここではじめてステファニーはレベッカの「怒り」の気持を少し理解できたはずだ。



oparadox/newgrangepictures/zentropa
international sweden 2013
『おやすみなさいと言いたくて』
価格 ¥4,700+税 7月3日(金) 発売予定
発売元・販売元 株式会社KADOKAWA
角川書店

■□■レベッカを動かすのは本能と怒り！その情熱の根源は？■□■

さらに、ラストに向けてレベッカが更なる決断を下す中、マーカスとの会話の中で「私が写真を撮るのは本能だ」というセリフが登場する。金や名誉のためではなく、ただ戦争写真を撮ることに固執するレベッカの姿勢を見ていると、たしかにそれがもっとも正確な表現だということがよくわかる。

パンフレットにある監督インタビューでエーリック・ポッベ監督は、「二人とも情熱家ですね」と表現しているが、更に突っ込むと「レベッカは一種の『戦争中毒』ですね。アドレナリン中毒と言いますか」と答えているのが印象的だ。ちなみに、私は弁護士の仕事を「本能」としてやっているとは思わず、「天職」としてやっていると思っている。また、私が弁護士を目指したのも社会に対するさまざまな「怒り」からだっただけで、レベッカの「戦争写真を撮り始めた頃は怒りからだ」という言葉もすんなり理解できる。

他方、私の場合は男だから、妻の協力（援助、献身）を得てその道を一途に進むことができたが、レベッカの場合は女性として、とりわけ母親としての役割（生き方）との葛藤

が必然的に生まれてきたわけだ。パンフレットにある、①大橋希（「ニューズウィーク日本版」編集者）の『母の選択』という視線を越えて」や②細谷美香（映画ライター）の「情熱の人、ジュリエット・ビノシュが伝える揺らぎ」を読めば、そこらあたりの女性としての生き方の葛藤がよくわかる。仕事？それとも家庭？という問題で悩んでいるあなたは、それを参考にしてみれば・・・。

■昔はフィルム！今はデジカメ！■

私をはじめて中国旅行をした2000年8月当時のカメラは、デジタル方式ではなくフィルム方式だったから、3泊4日の大連・旅順・瀋陽旅行で使ったフィルムは36枚撮りで約20本もあった。しかし、その後はデジカメが普及し、次々と新製品が出てきたから、私は毎年のようにそれを購入した。バッテリー容量もSDカードやCF（コンパクト・フラッシュ）等の記憶媒体の容量も当初は小さかったが、次第にそれも増え、今では2000枚でも3000枚でも取り放題ができるようになっている。

本作にみるレベッカの報道写真家としての仕事ぶりを見れば、デジカメのありがたさがよくわかるし、その後のパソコン上の処理やテレサへの転送のシーンを見ていると、とにかく便利になったものだと痛感する。中国進出から太平洋戦争に至る日本の歴史的流れの中で、報道写真（戦争写真）は大量に写されているが、そのすべてをフィルムでやっていた時代の撮影の大変さも逆によくわかる。

本作でデジカメの威力やそのありがたさがよくわかるのは、安全だったはずのケニアの難民キャンプを突然、武装した民兵グループが襲ってきた時。スティグの指示によって直ちに現場から離れるはずだったが、そこでレベッカはステファニーを車の中に押し込み、自分は残ると言い始めたから、こりゃムチャクチャ。重大な約束違反だ。本作にみるジュリエット・ビノシュの演技は母親としての優しい面と、怒りと本能によって戦争写真を撮るプロの厳しさの両面を見事に演じ分けている。したがって、ここでの「私は残る！」というセリフの迫力はすごい。

■この約束違反は如何なもの？家族崩壊の危機に・・・■

逃げてくる難民の動きに逆らって、シャッターを切りながら武装民兵の方に向かっていくレベッカの姿は感動的だが、ホントにこんな無茶をしていいの？テントの中に隠れてシャッターを切り続け、民兵が難民たちを射殺していく姿を次々と撮影していたが、そこでレベッカに危害が及ばなかったのは単なる偶然と、たまたま政府軍の救援が早かったためとしかいいようがない。もっとも、それはそれでレベッカの本能のなせるワザという説明もつくが、ステファニーとの約束違反、更にマーカスとの約束違反のケリはどうつけるの？

大人になったステファニーは「このことはパパには内緒に・・・」と言ってくれたが、以降レベッカには心を閉ざしてしまうことに。そして、我が家に戻った時、レベッカがス

テファニーのパソコンを開いてステファニーの写真撮影の状況を確認していると、そこにマーカスが入ってきたから大変。「ママ、車に乗って！」と泣き叫ぶステファニーを車の中に残し、自らは銃弾音の方に向かっていくレベッカの姿をみると、マーカスの心が怒りに震えたのは当然だ。そこでマーカスはレベッカのカメラを家の外に放り出したばかりか、レベッカに対して「出て行ってくれ！」と言い放ったから、ここに至ってこの4人家族は家族崩壊の危機に・・・。

■□■レベッカの再度の決断は？■□■

私は今、弁護士として、夫側からの依頼で、離婚に伴う子供との面会交渉と子供の引き渡し請求の仮処分事件をやっているが、本作でも我が家を出て行こうとするレベッカが2人の子供を無理やり車の中に乗せようとするシーン、そしてマーカスがそれを必死に食い止めようとするシーンが描かれる、コトがここまでこじれてしまうと本当に大変だが、さてその結末は？

それはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、本作ではその後、行くところに困ったレベッカが友人のトム（ラリー・マレン・ジュニア）の家を訪れるシークエンスが登場する。折しも、いったん出版できないとされていたレベッカの写真集が出版できることになったとテレサから連絡を受けたのは吉報？それとも・・・？ここらあたりは脚本上少しできすぎの感もあるが、その後スクリーン上では、身支度を整えたレベッカが空港に立ち、チケットを渡して再び紛争地に入り込むのか、それとも我が家に引き返すのかの葛藤が印象深く描かれるので、それに注目！

■□■やっぱり！やっぱり！やっぱり！ラストシーンに注目！■□■

ところが、その次に登場してくるのは、レベッカが我が家に帰ってくるシーン。アレレ、レベッカは再び家庭に戻り、良き妻、良き母を目指すの？そう思っていると、やっぱり、やっぱり、やっぱり、結論は逆だ。

本作ラストには、再び冒頭と同じような緊迫したシーンが登場し、再びレベッカが爆弾を体に巻きつける自爆テロ犯の女性の姿を撮影するシークエンスとなる。そこで大きく違うのは、冒頭シーンは若い女性だったが、今度は少女だということ。いくらアッラーの神の導きがあるとはいえ、こんな少女がこんな形で自爆テロ犯に・・・？しかし、レベッカに与えられた使命は、それを撮影し続けること。ステファニーの言葉によると、リサは「ママは世界最強だ」と言っていたそうだが、さてそこでのレベッカの撮影は・・・？

そんなラストシーンに注目しながら、アフガニスタンには今なおこんな厳しい現実があることを、去る12月14日に実施された第47回衆議院議員総選挙の投票率が52%に留まったという日本の実態と比較しながら、じっくり考えたい。

2014（平成26）年12月24日記